

年間活動報告

【2021年度】

・本報告は、『千總文化研究所 年報』第4号（2023年4月）に掲載した内容の内、以下の概要を抜粋したものである。

当研究所の所員が実施した、講演および発表などの教育・研究活動
当研究所が主催した研究会および講演会等
展覧会への出陳協力、文化財保存管理活動等

- ・講演会および研究会の登壇者の所属、役職は、開催当時のものを表記する。
- ・掲載画像の無断転載を禁止する。

12代西村總左衛門の活動に関する基礎的研究

[担当者]

小田桃子

[概要]

本研究は、明治・大正・昭和時代に千總の当主を務めた12代西村總左衛門(1855~1935)(以後、12代西村)の生涯を通じた活動の全容を明らかにすることを目的としている。本稿は、2021年度に実施された、明治・大正時代の京都美術協会発行の雑誌および関連資料を対象とした調査の概要を報告し、その上で12代西村および側近の齋藤宇兵衛(以後、齋藤)の活動に関する考察を行うものである。

京都美術協会発行の雑誌計205冊のうち、122冊に12代西村または齋藤に関する記事が掲載されていた。記事の内容は、同協会の役員人事や会合出席に関する報告、ならびに博覧会および新古美術品展覧会などにおける審査員の任命報告および出品・受賞報告が大半を占めた。記事によると、12代西村は、同協会が発足した1890(明治23)年から評議員を務めたが、1910(明治43)年には幹事に選定された。審査で、12代西村と齋藤は、主に刺繍、染物、図案などの区分をそれぞれ担当している。新古美術品展覧会で

は12代西村が主に刺繍、齋藤が主に刺繍または染物の審査員を務めていた。その他に、12代西村の業績紹介の記事および発言を掲載した記事を各2件確認した。業績紹介では、染色技術の開発や国内外への販路拡大ならびに1893(明治26)年のシカゴ万国博覧会への出品総代としての現地派遣が共通して言及されていた。また、12代西村自身の発言は、同業者による展覧会出品作品に対する評価と、過去10年間の千總の刺繍作品に対する回顧文であった。本調査を通して、12代西村および齋藤の同協会に関する具体的な活動の一部が明らかとなった。また12代西村におけるシカゴ万博の位置づけの重要性、ならびにこれまで十分に明らかにされていなかった12代西村自身の発言が、それぞれ確認された。当該記事は抜粋して、現代語訳を行い、関連資料で得られた情報を補足した上で、年表に集約し、当研究所の公式ホームページにて公開した(https://icac.or.jp/public/culture/sozaemon_12/)。

本研究は公益財団法人高梨学術奨励基金 令和3年度研究助成を受けて実施された。

〈大津唐崎図〉の保存修復 および表現・技法材料に関する研究

[担当者]

小田桃子、増淵麻里耶（京都芸術大学）

[概要]

〈大津唐崎図〉（株式会社千總所蔵）は、1875（明治8）年に日本画家の岸竹堂により制作され、千總の当主の名前で翌年のフィラデルフィア万国博覧会に出品された屏風絵画である。近年、作品の損傷を改善する為に屏風下地の交換をとまなう本格的な修復が決定されたことを受けて、2021年度に作品の色材調査および関連資料の熟覧調査が行われた。本稿は調査の中間報告と、調査結果に基づく考察を行うものである。

幕末から明治時代は、西洋からのさまざまな技術の流入にとまなない、絵画における画材や表現技法の多様化が進んだ時代である。そのため、色材調査では目視観察に加えて、理化学機器を用いて色材を自然科学的に分析することを試みた。本年度の分析では蛍光X線分析およびデジタルマイクロスコープ観察を通して、右隻で24箇所、左隻で25箇所

に対する測定および観察が行われた。目視調査では、本作の素地の大半に銀色の色材が塗られていること、ならびに右隻の白色表現において胡粉のような滑らかな色材および鉋物のような粗い色材が併用されていることを確認できた。こうした表現は描写物の質感や奥行き感に繋がる一方で、油画のマチエール表現を想起させる。関連資料の熟覧調査では、〈大津唐崎図〉の右隻の小下絵（個人蔵、滋賀県立美術館寄託）において、部分的な描き直しが確認された。筆者はそれを画面の奥行きを強調するための竹堂の試行錯誤であると考察した。他方で、当時の出品アルバムおよび〈大津唐崎図〉の保存箱から、当初は本作の裏面に岸竹堂筆〈梅図〉が貼り込まれていた可能性が示唆された。なお、理化学機器による色材調査の結果報告、およびそれを踏まえた上での本作の技法材料に関する考察は、修復完了後での発表を予定する。本研究では今後も同様の調査を継続し、最終的には〈大津唐崎図〉の成立過程に肉薄することで、西洋から影響を受けた当時の日本絵画の変容過程の一例を示すことを目指す。

染織技術から学問とクリエイティビティを学ぶ 教育プログラムの開発

[担当者]

加藤結理子、下郡啓夫 (函館工業高等専門学校)

[概要]

株式会社千總 (以下、千總) がもつ無形・有形の文化財を活用した教育プログラムの開発を、函館工業高等専門学校の下郡啓夫教授との共同研究として行った。

千總の着物に用いられる伝統的染織技術には、デザイン構想から完成まで数十もの工程があり、その多くが手仕事による分業で行われている。多様な技術とその背景にある日本の文化は、農学、化学、人文学をはじめとするさまざまな学問分野を内包するだけでなく、より美しいもの、品質の高いものをつくりだすために研ぎ澄まされた職人の創造力と探求心が凝縮されている。

しかし、着物をはじめ日本の伝統工芸品の多くは生活様式の変化のなかで需要が減少し、日常生活のなかで手に触れる機会は少なく、まして技術やその担い手のことを知る手段は限られる。一方で、昨今ではSTEAM教育をはじめ学際的な学びが、クリエイティブな人材を育成するものとして注目されている。そうした社会的背景のもと本事業は、染織

技術を題材として、創造力豊かな人材育成に資する新しい教育プログラムの可能性を探ることを目的としたものである。

本プログラムでは、Visible Thinkingならびに知識構成型ジグソー法といった教育手法を取り入れ、着物に描かれている模様と日本の文化、着物とその技術の歴史を多角的な視座から観察や検証することに取り組んだ。さらに、友禅染の色づくりや、手描き友禅、手捺染、インクジェットプリントといった3つの異なる染色技術の特性をテーマとしたワークショップを実施した。

本事業は、日本STEM教育学会をはじめとする教育分野の学会において発表され、次年度も継続して行われる予定である。また、教育分野のみならず、染織分野の研究者や技術者をはじめ広く一般への発表として、当研究所主催によるオンライン形式の報告会を実施した。

本事業は、令和3年度文化庁補助金「地域と共働した博物館創造活動支援事業」並びにJSPS 科研費20K02899 (研究代表 下郡啓夫) の助成のもと実施された。

産学連携事業:

株式会社千總所蔵の近代工芸資料に関する調査

明治・大正・昭和時代の型友禅関連資料「絵刷」の調査および実習

[担当者]

小田桃子、増淵麻里耶(京都芸術大学)

[概要]

明治時代に合成染料が大々的に輸入されて以来、盛んに生産された型友禅染の製品。型紙を用いてあらゆる形を素早く染めるこの技術を用いて、千總を含めさまざまな企業が色鮮やかな模様の衣服を人々に届けた。近年、明治・大正・昭和時代に制作された型友禅の関連資料である「絵刷」の冊子147冊、約14700枚の絵刷が株式会社千總に寄贈された。絵刷各紙の表面にはさまざまな文様、裏面には日付や職人の名前、注文主などが記されている。当研究所は、近代における千總の型友禅製品の生産の実態の解明を目指し、本資料の調査を開始した。

本稿は、2021年度に京都芸術大学と株式会社千總との

覚書のもとに実施された、絵刷の調査および中間報告会について報告するものである。本年度の調査では、同学歴史遺産学科の正課授業の一環として、学生による絵刷の撮影および調書の作成が実施された。全9回の授業で4冊449枚の絵刷裏表の撮影を完了し、そのうち3冊123枚についての調書を作成した。他方で、学生が絵刷の文様に関する発表を行い、また当研究所が友禅染の技術や千總の関連資料について講義し、専門家を招いた報告会を開催することにより、絵刷の総合的な理解に取り組んだ。

本事業では、学術利用などを含む絵刷の文化資源化を目指して、絵刷のデジタルアーカイブ作成を最終的な目標としている。次年度以降も同様の調査を実施する予定である。本研究が、現代まで伝承されてきた型友禅染の発展と後世への継承に貢献できることを期待する。

[特別鑑賞会・講演会]

シリーズ・京都のなかの三条室町 第1回

王朝時代の庭園 —三条烏丸御所を足掛かりに

講師：仲 隆裕（京都芸術大学）

日時：2021年12月7日（火）午後1時30分～3時30分

実施形式：来場およびオンライン配信

会場：千總ビル5階ホール（見学：千總中庭および千總ギャラリー）

参加者：来場21名、オンライン24名

[概要]

古来、千總の主な活動拠点である三条室町。千總にはそうした、土地や建物または行事など、町に関係する資料が現存しており、近世に千總の当主が御倉町の政にも関与していたことが明らかにされている。そしてこうした事実は、町との関係が千總の長年の商売には不可欠であったことを示唆する。本シリーズではこうした資料を、町と千總を繋ぐ依代と捉えてテーマに取り上げる。千總の商売を育んだ三条室町という地域について学び、千總のみならず地域の営みへの理解に繋げることを目指す。

第1回目のテーマは平安時代の「庭園」である。当時の三条室町界隈は貴族の邸宅街であった。現在の千總本社ビルの敷地は、平安時代後期に成立したのちに鳥羽上皇に献上された「三条烏丸御所」の庭園の一角であったことが、1987（昭和62）年の発掘調査により明らかとなっている。本会では、当時の発掘調査に関与した仲隆裕教授を講師に迎え、三条烏丸御所を含む平安時代の庭園と、様式の変遷や当時の楽しみ方について講演いただいた。講演後には、講師および参加者が共に、庭園の名残を留める千總の中庭を見学した。本稿は、本特別鑑賞会・講演会の内容の一部を書き起こして報告するものである。

[講師]

仲 隆裕（なか たかひろ）

京都芸術大学（旧名称京都造形芸術大学）歴史遺産学
科教授・学科長。博士（農学・京都大学）。

千葉大学大学院園芸学専攻環境緑地学専攻修士課程修了。京都市文化財保護課文化財保護技師（記念物担当）、山中庭園研究所、千葉大学助手（園芸学部）などを経て、現職。庭園文化史研究、文化財庭園を中心とする遺跡の保存修復・整備に取り組む。元文化庁文化審議会文化財分科会第三専門調査会委員（名勝委員会）。著書に『京都の庭園—遺跡にみる平安時代の庭園』（京都市文化財ブックス第5集、1990）、『庭園史をあるく—日本・ヨーロッパ編』（分担執筆、昭和堂、1998）、『夢窓疎石』（分担執筆、春秋社、2012）など、主な設計・計画などに「史跡名勝平等院庭園州浜整備実施設計・施工指導」（京都府宇治市）、「旧上野家庭園保存修復」（京都府舞鶴市）、「シェーンブルン宮殿内石庭保存整備」（オーストリア）など。

社会活動

[講演・レクチャー]

シンポジウム「京都の近代化遺産－近代化を支えた人びと」

日時：2021年10月3日（日）

タイトル：明治期の染織品－博覧会への出品と百貨店との商売を中心に

実施方式：オンライン

主催：「京都の近代化遺産」発信プロジェクト実行委員会

共催：京都工芸繊維大学美術工芸資料館

実施者：小田桃子

[寄稿]

1. 「THE KYOTO」連載「日本のエレガンス 千總460年」

実施期間：2021年4月～2022年3月 毎週木曜日

掲載サイト：THE KYOTO webサイト (<https://www.kyoto-np.co.jp/list/thekyoto>)

主催：THE KYOTO（株式会社 京都新聞社）

内容：株式会社千總が所蔵する染織品および絵画等について解説、同サイト内「#表現の交差点」で配信された。

実施者：加藤結理子、小田桃子

2. 「美術の教育／教育の美術」展カタログ

発行日：2021年10月

タイトル：明治期の染織品－博覧会への出品と百貨店との商売を中心に

掲載ページ：p.62

発行：京都工芸繊維大学美術工芸資料館

実施者：小田桃子

3. 中外日報

発行日：2021年10月1日（金）

タイトル：大谷派の法衣装束調査「御装束師 千切屋惣左衛門」をめぐって

発行：株式会社 中外日報

実施者：加藤結理子

4. 『シルクレポート』No.71 2021年10月号

発行日：2021年10月1日（金）

タイトル：蚕糸・絹業団体情報 一般社団法人千總文化研究所の紹介

掲載ページ：p.13-14

発行：一般財団法人 大日本蚕糸会

実施者：加藤結理子

5. 『ふでばこ』41号

発行日：2021年6月25日（金）

タイトル：京の美学 日本の心「人の手と道具」

掲載ページ：p.136-137

発行：株式会社 白鳳堂

実施者：加藤結理子

[教育]

京都芸術大学 歴史遺産学科

内容：客員研究員

実施者：小田桃子

[学会発表]

1. 日本STEM教育学会 拡大研究会

日時：2022年3月5日（土）

タイトル：STEAMを内包する伝統的染織技術の教育教材としての可能性

実施方式：オンライン

主催：日本STEM教育学会

実施者：加藤結理子、下郡啓夫（函館工業高等専門学校）

2. 第28回大学教育研究フォーラム

日時：2022年3月17日（木）

タイトル：伝統的染織技術を教材としたSTEAM教育プログラム開発の試み

実施方式：オンライン

主催：大学教育研究フォーラム実行委員会

共催：京都大学高等教育研究開発推進センター、京大オリジナル株式会社

実施者：加藤結理子、下郡啓夫（函館工業高等専門学校）

3. 第28回大学教育研究フォーラム

日時：2022年3月16日（水）～17日（木）

タイトル：伝統的染織における職人文化を取り入れた教育プログラムの開発（ポスター発表）

実施方式：オンライン

主催：大学教育研究フォーラム実行委員会

共催：京都大学高等教育研究開発推進センター、京大オリジナル株式会社

実施者：加藤結理子、下郡啓夫（函館工業高等専門学校）

4. 大学教育フォーラムin東海2022 ポスターセッション

日時：2022年3月5日（土）

タイトル：伝統的染織技術に着目したSTEAM教育による創造性開発の試み（ポスター発表）

実施方式：オンライン

主催：大学教育改革フォーラムin東海2022 実行委員会、東海国立大学機構 名古屋大学 高等教育研究センター

実施者：加藤結理子、下郡啓夫（函館工業高等専門学校）

[取材]

1. 京都新聞

発行日：2021年8月25日（水）

テーマ：真宗大谷派寺院・姫路船場別院本徳寺および真宗大谷派谷門首一族が所蔵する法衣装束の調査について

発行：株式会社 京都新聞社

担当者：加藤結理子

2. 北海道新聞

発行日：2021年12月7日（火）

テーマ：函館工業高等専門学校における「STEAM教育」の実践

発行：株式会社 北海道新聞社

担当者：加藤結理子

展覧会協力活動

当研究所は、株式会社千總（以下、千總）の所蔵品の調査研究および保存管理を実施している。その一環として、他館への貸出や千總ギャラリーの展覧会実施に際して、所蔵品調査および企画への協力を行っている。

本年度は下記の通りに活動を実施した。

貸出に係る調査協力

1. 「寿ぎのきもの ジャパニーズ・ウェディング 日本の婚礼衣裳」

会場/会期：横浜・そごう美術館/2021年10月16日（土）～11月14日（日）

奈良県立美術館/2022年4月23日（土）～6月19日（日） ※以後、福井市立郷土歴史博物館に巡回（2022年度10月展示開始予定）。

調査対象：〈三襲 松竹梅模様振袖〉、〈打掛 若松模様〉、〈打掛 御殿模様〉、〈二枚重ね 波に松芦模様〉（以上、13代西村總左衛門夫人 婚礼衣裳）、〈打掛 霞に松模様〉、〈振袖 波に鶴模様〉、〈振袖 御簾に桧扇文様〉（以上、14代西村總左衛門夫人 婚礼衣裳）

2. 「重要文化財指定記念特別展 鈴木其一・夏秋溪流図屏風」

会場：根津美術館

会期：2021年11月3日（水）～12月19日（日）

調査対象：円山応挙筆〈保津川図〉

3. 「KIMONO: KYOTO TO CATWALK」

会場：Världskulturmuseet (The Museum of World Culture) (スウェーデン)

会期：2021年8月17日（火）～2022年1月30日（日）

*以後、Musée du quai Branly - Jacques Chirac (フランス) に巡回（2022年11月展示開始予定）。

調査対象：ヨウジヤマモト〈振袖〉および〈帯〉

千總ギャラリーの展覧会への協力

1. 「歩み始めた図案」

会期：2021年8月28日（土）～11月28日（日）

内容：企画協力、所蔵品調査、一部の展示ケースにおける協力展示、コラム執筆

協力展示における出陳内容：〈絵刷冊子No.146〉、〈型友禅裂 紅無友仙見本裂〉、〈第24回懸賞募集図案（全3巻の内、1巻目）〉

執筆内容：株式会社千總公式webサイト展覧会コラム「合成染料が切り拓く新時代」（2021年10月29日公開、小田桃子）

同「図案」の発見と展開（2021年11月12日公開、小田桃子）



展示風景「歩み始めた図案」展

2 「花と鳥をうつす」

会期：2021年12月4日（土）～2022年2月20日（日）

内容：企画協力、所蔵品調査、一部展示ケースにおける協力展示、コラム執筆

協力展示における出陳内容：〈卓被窓掛雛形〉、〈縮図捲り〉

関連情報：株式会社千總公式webサイト展覧会コラム「『景年花鳥画譜』を求めた時代」（2022年2月21日公開、小田桃子）



展示風景「花と鳥をうつす」展

所蔵品の保存管理活動

株式会社千總（以下、千總）には、約130点の小袖をはじめ、絵画、工芸品、古文書・典籍、歴史資料など、多岐にわたる文化財が所蔵されている。当研究所はそうした所蔵品の保存管理業務を日常的に行っている。本年度の実施内容を以下の通りに報告する。

1. 保存環境整備

千總の所蔵品は創業以来、制作および収集されたものであり、時代の変遷にともないさまざまな保存形式で保管されている。当研究所は、近年の文化財保存科学に関する研究成果に基づき、保存環境の改善に取り組んでいる。本年度は、文化財の劣化促進の懸念される段ボール・クラフト紙の除去を目的とした保存具の新調、ならびに温湿度および防虫対策に関して下記の通りに整備を実施した。

[保存具の新調]

・屏風および扁額などの保存袋18点を新調

[温湿度・防虫対策]

・新規購入または保管場所の移動などともなう、所蔵品の二酸化炭素による殺虫処理（イカリ消毒株式会社により実施）

・収蔵庫用可動棚2台の設置



二酸化炭素による殺虫処理の様子

2. 記録作成

長年にわたり蓄積された千總の所蔵品には、染織品や絵画などの美術工芸品だけでなく、過去の法衣や友禅などの商売に関する膨大な古文書および歴史資料が含まれている。そうした所蔵品の全貌および収集背景を把握するべく、当研究所は千總とともに目録の整理および画像記録の作成を進めており、本年度は下記の通りに実施した。

[撮影]

・屏風1件、掛軸15件、卷子1件、染織品1件、典籍3件、古文書146件、歴史資料4件

[スキャンニング]

・賞状および感謝状311件、歴史資料60件

3. 資料購入

千總では、コレクションの充実を目指して、近世・近代の千總または当主・西村（千切屋）總左衛門に関する作品を随時収集している。当研究所は作品の購入に際し、専門的見地から調査・助言を行っている。本年度は下記の作品購入に際して協力を実施した。

・打敷1枚

・ピロード友禅製品の英文解説書1通

Basic research on the activities of Nishimura Sōzaemon XII

Researcher

Oda Momoko

Summary

The objective of this research is clarifying the activities of Nishimura Sōzaemon XII (1855-1935), who was the head of Chiso from 1872 in the Meiji period, to 1935 in the Shōwa periods. This article summarizes the survey on journals published by the Kyoto Art Association and related documents carried out in FY2021. In addition, it provides an analysis of the activities of Nishimura Sōzaemon XII and his adviser Saitō Uhē based on the results of this survey.

Out of the 205 journals published by the Kyoto Art Association, 122 included articles related to Nishimura or Saitō. Most of the articles were reports on the composition of the members of the board of the Association and the participation of members in its meetings. In addition, there were reports on appointments to the panel of judges of expositions and exhibitions such as *shinkobijutsuhintenrankai* (Arts and Antiques Exhibitions), the exhibition of works, and the awards received. Nishimura was a councilor of the Association since its foundation in 1890, and was elected as a secretary in 1910. In addition, Nishimura and Saitō were appointed as judges of exhibitions in the fields of embroidery, dyed textiles, and design. Regarding the Arts and Antiques Exhibitions,

Nishimura was in charge mainly of embroidery, and Saitō mainly of embroidery or dyed textiles. Moreover, there were two articles detailing Nishimura's achievements, and two articles reporting his remarks. Both articles on Nishimura's achievements mentioned his development of dyeing techniques, his expansion of both the national and the overseas markets, and his participation as a representative in the 1893 Chicago World's Fair. The remarks directly made by Nishimura were assessments on the works displayed at exhibitions, and his recollections about Chiso's embroidery works in the last ten years. As a result of this survey, a part of the activities carried out by Nishimura and Saitō in the Kyoto Art Association has become clear. On the other hand, the significance of the 1893 Chicago World's Fair in Nishimura's career was confirmed. Furthermore, the articles detailing Nishimura's remarks during his lifetime are also revealed. The information gained from the extracted articles and related documentation was summarized in a chronological table and published in the webpage of the Chiso Institute for Arts and Culture (https://icac.or.jp/public/culture/sozaemon_12/).

This research was carried out with funding from the Takanashi Foundation for the Promotion of Academic Research, FY 2021.

Conservation and restoration of *Ôtsu Karasaki Zu* and research on its style, techniques and materials

Reseachers

Oda Momoko, Masubuchi Mariya (Kyoto University of the Arts)

Summary

Ôtsu Karasaki Zu, part of the Chiso collection, is a painting on a pair of folding screens made by the Japanese painter Kishi Chikudō in 1875, and displayed under the name of Chiso's head Nishimura Sōuemon (Sōzaemon XII) at the Philadelphia World Exhibition. It was decided to carry out a full-scale restoration through the replacement of the wooden lattice core of the folding screen in order to repair the damage to the work. Before the start of the restoration, a survey on the pigments employed in the work and a careful inspection of related documents was carried out in FY2021. This article is an interim report of this survey and an analysis based on its results.

During the late 19th century, several techniques were introduced from Europe, bringing about a diversification of materials and techniques used in painting. This survey examined the pigments employed in *Ôtsu Karasaki Zu* through visual inspection and scientific analysis using laboratory equipment. During FY2021, 24 samples from the right folding screen and 25 samples from the left folding screen were examined using X-ray fluorometry and observed with the digital microscope. Through visual inspection, it was possible to confirm that a silver

coloring material was used as foundation for most of this work. In addition, it was determined that the white color on the right folding screen was made by combining two types of pigments: a smooth material resembling *gofun* (calcium carbonate powder), and a mineral-like rough material. These painting techniques provide texture and depth to the painted subject, and call to mind the concept of *matière* used in oil paintings. During the detailed inspection of related documents, it was found that a draft of the right folding screen (private collection, deposited at The Shiga Museum of Art) had been partially redrawn. The author believes that this was part of a trial-and-error process by Chikudō to emphasize the depth of the painting. On the other hand, an analysis of a contemporary album of exhibited works and the box where *Ôtsu Karasaki Zu* was conserved suggests the possibility that another work by Chikudō, *Ume Zu* (Plum Blossoms), was originally attached to the backside of *Ôtsu Karasaki Zu*. The results of the scientific analysis carried out with laboratory equipment, and the analysis of techniques and materials based on those results, will be published after the completion of the restoration. Similar surveys will continue to be carried out during this research. Ultimately, the research aims at clarifying the creation process of *Ôtsu Karasaki Zu*, as one of the works showcasing the changes that Japanese painting went through at the time under western influence.

Development of an educational program to learn knowledge and creativity from textile techniques

Researchers

Kato Yuriko, Shimogōri Akio (National Institute of Technology, Hakodate College)

Summary

An educational program that puts to use the tangible and intangible cultural property held by Chiso was developed as a joint research with Professor Shimogōri Akio from the National Institute of Technology, Hakodate College.

The traditional textile techniques used to create a Chiso *kimono* include dozens of separate processes, from the original conception of the design to the completion. Many of those processes are carried out by hand by specialized craftspeople. Their varied techniques are an expression of Japanese culture, and include knowledge belonging to different academic fields, such as agricultural science, chemistry, or humanities. In addition, they show the refined creativity and aspirations of the craftspeople, who constantly endeavor to create more beautiful products of better quality.

However, due to the changes in lifestyle, the demand for many Japanese traditional products including *kimono* has decreased. It has become rare to find such products in everyday life, and opportunities to interact with craftspeople and learn about them are uncommon. On the other hand, interdisciplinary education methods, such as the STEAM approach, are recently receiving attention

as a way to train creative individuals. Taking this social background into account, this project aims at exploring the possibilities of an educational program focused on the training of creative individuals and using textile techniques as a topic.

This program applied educational methods such as ‘Visible Thinking’ and the ‘constructive knowledge jigsaw method’ to the observation and examination from different points of view of the patterns of *kimono*, their relationship with Japanese culture, and the history of the techniques associated with *kimono*. In addition, a workshop was held on the preparation of colors used for *yūzen* dyeing and the features of three different types of dyeing techniques (hand-drawn *yūzen*, hand printing, and inkjet printing).

The results of this project were presented at the Japan Society for STEM Education and other academic societies in the field of education. The project will continue next fiscal year. In addition, the project was presented to researchers and craftspeople of the field of textile products and to the general public in an online conference organized by this Institute.

This project was carried out with funding from the ‘Project for the support of the creative use of museums in collaboration with local communities’ (FY2021) from the Agency of Cultural Affairs of the Japanese Government, as well as Kakenhi grants-in-aid for scientific research from the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS), grant number 20K02899 (principal researcher: Shimōgori Akio).

Business-academia collaboration: Survey on documentation related to late modern period industrial arts in the Chiso collection.

Research and practical training on *ezuri* -documents related to the *kata-yūzen* technique- from the Meiji, Taishō and Shōwa periods.

Researchers

Oda Momoko, Masubuchi Mariya (Kyoto University of the Arts)

Summary

Textile products employing the *kata-yūzen* technique (stencil dyeing) were manufactured in large numbers after the full introduction of synthetic dyes in the Meiji Period (1868-1912). This technique uses paper stencils to dye, allowing to create a large variety of shapes in a short time. Through the use of the *kata-yūzen* technique, manufacturers such as Chiso were able to provide clothing with colorful designs. Recently, 147 binders containing approximately 14700 *ezuri* (sheets of paper imprinted with design patterns) used in the *kata-yūzen* technique and dating from the Meiji, Taishō (1912-1926) and Shōwa (1926-1989) periods were donated to Chiso. The front side of the *ezuri* shows different types of designs, while the back often contains written information such as date and names of craftspersons or clients. The Institute for Chiso Arts and Culture has started a survey of this documentation with the objective of clarifying the *kata-yūzen* manufacturing process in the late modern period.

This article describes the survey on *ezuri* and the mid-term report session of its results carried out in FY2021 under a memorandum of understanding between Kyoto University of the Arts and Chiso Co., Ltd. Students of the Department of Historical Heritage of this University photographed the *ezuri* and compiled information on survey sheets as part of their regular class curriculum. During nine class sessions, 449 *ezuri* (contained in four binders) were photographed from both sides, and survey sheets of 123 of them (contained in three binders) were created. In addition, the expert was invited to a mid-term report session aimed at improving the overall understanding about *ezuri*. In this session, the students gave a presentation on the designs of the *ezuri*, and the Institute gave a lecture on the *yūzen* dyeing technique and the documentation related to it held in the Chiso collection. The ultimate objective of this project is transforming the *ezuri* into a cultural resource for academic research through the creation of a digital archive.

This survey is planned to continue in the following years. We expect that this research will contribute to the development and handing down to the future of the *kata-yūzen* technique.

[Special Exhibition and Lecture]

Lecture Series: The Sanjō-Muromachi area in Kyoto (First Lecture)

The Gardens of the Dynastic Period from the Example of the Sanjō Karasuma Gosho Palace

Lecturer: Naka Takahiro (Kyoto University of the Arts)

Time and Date: 7 December 2021 (Tuesday) 13:30-15:30

Format: On-site and online

Venue: Chiso Building 5th Floor Hall (Site visit: Chiso inner garden and Chiso Gallery)

Participants: 21 on-site, 24 online

Summary

The Sanjō-Muromachi area in Kyoto has historically been the base of Chiso's activities. Several historical documents held in the Chiso archives show the relationship between Chiso and this area, its land, buildings and rituals. From the early modern period, the head of Chiso was also involved in the administration of the Mikurachō district in this area. These facts indicate that the support of the local community was essential for Chiso to develop its business throughout so many years. The topic of this lecture series will be the analysis of historical documents showing the relationship between Chiso and the Sanjō-Muromachi area. Through this analysis, we will learn about Sanjō Muromachi as the area that supported Chiso's business activities, and deepen our understanding not only about Chiso but also about the life of the surrounding city.

The topic of the first lecture is the garden of the Heian period (794 - 1185). At that time, the Sanjō-Muromachi area was occupied by palaces of the nobility. Archaeological excavations carried out in 1987 revealed that the site where the current Chiso headquarters building stands was part of the garden of the Sanjō Karasuma Gosho Palace, which was established in the late Heian period and later donated to retired emperor Toba. In this lecture, professor Naka Takahiro, who participated in the excavation, explained about the style, historical development and use of the gardens of the Heian period, including the Sanjō Karasuma Gosho Palace. After the lecture, participants had the opportunity to join the lecturer in a visit to the Chiso inner garden, which retains traces of the historic garden. This article is a summarized transcription of this site visit and lecture.

Lecturer

Naka Takahiro

Professor and Director of the Department of Historical Heritage, Kyoto University of the Arts (former Kyoto University of Art and Design). Doctor of Agriculture from the University of Kyoto.

Master from the Chiba University Graduate School of Horticulture, Department of Environmental Green Studies. Technical expert in charge of monuments of the Kyoto City Department of Cultural Properties. Worked at the Yamanaka Garden Research Institute and as a Research Assistant at the Faculty of Horticulture of Chiba University. He carries out research on the cultural history of gardens, and works on the conservation, restoration and enhancement of cultural sites, especially gardens designated as cultural properties. Former member of the 3rd expert survey committee (committee for places of scenic beauty) of the cultural properties section of the Council for Cultural Affairs, Agency for Cultural Affairs. Author of books such as *Kyoto no teien – iseki ni miru Heian jidai no teien (The Gardens of Kyoto: The Gardens of the Heian period Seen from Historical Sites)*, Kyoto-shi bunkazai bukkusu daigoshū, 1990), *Teiensi wo aruku – nihon yōroppa hen (Walking through the History of Gardens: Japan and Europe)*, co-authored, Shōwadō, 1998), *Musō Soseki* (co-authored, Shunjūsha, 2012). Designer of works such as the *Plan and Execution Guidance for the Enhancement of the Shore (Subama) of the Byōdō-in Temple Garden, a Historical Site and Place of Scenic Beauty* (Uji City, Kyoto Prefecture), the *Conservation and Restoration of the Former Ueno Family Garden* (Maizuru City, Kyoto Prefecture), and the *Conservation and Enhancement of the Stone Garden in Schönbrunn Palace* (Austria).